

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第51回
ITエンジニアの匠

マイナスになる経験など、ない。

背中を見て育つ、背中を見せて育てる。親子の関係、上司との関係、職人の世界ではよく使われる言葉だ。赤石の歩みは、まさにこの言葉通り、背中を見て学び、そして、今、背中を見せて学ばせている。



赤石のキャリアは、日本 IBM の中でもユニークなものだ。スタートは東京基礎研究所 (IBM Research-Tokyo)。つまり研究職だった。「もちろん希望して入所したわけですが、入ってみて、研究職よりも自分が合っている職種があるのではと思います。始めました」

赤石が手掛けた研究は教育関

連のソフトウェア。今でこそ基礎研究所は現場、お客様により近いところの研究も活発に行っているが、当時は審査付きの論文を何本ものにするかが重要視される、大学の研究室に近いアカデミックな形態であった。

「それが性に合わなかったのか、それだけの力がなかったのか…。教育関連のソフトウェアを研究していたのですが、学会で論文を発表するよりも自分の作ったソフトを使って教室で実際に生徒に教えたり、現場の先生方と議論している方が楽しかったです。学校の先生と共同授業をしたのもいい体験でした」

学会より教室。大学時代に数理工学を学んだ理由も、学問と実践

の接点を探していたから。

「優れた研究者というのは、ある部分を徹底的に深く、深く、極める。その特定分野を好きにならなければ勤まらない仕事だと思うのです。でも私は狭いところが苦手です。(笑)。できれば幅広い分野で、純粋な理論ではなく世間や社会との接点を持った仕事がしたいという希望を持ち始めました」

このようなこともあり、研究所から現場 SE へ。この経験が赤石の仕事の幅を広げることにつながり、メンター (指導者、助言者) として後輩社員たちのキャリアパスを支援する際にも生かされている。



現在、若手、中堅社員のメンターを担当する赤石が強く感じていること。それは若手にとってすべての経験はマイナスにはならないということだ。

「何でもやってみろ、ということですね。むしろ自分のバックグラウンドにないことにチャレンジするのは若いころだからできる。それはチャンスだと思ってほしい。その経験が将来生きてくるのです」

大きなチャレンジや違うキャリアを積むことは度胸が必要で、不安に思うことも多いかもしれない。「自分は



赤石 雅典 (あかいし まさのり)

日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・ビジネス・サービス事業 (GBS)
アプリケーション・イノベーション・サービス
エンタープライズ・インテグレーション
エグゼクティブ IT スペシャリスト

【プロフィール】

1987年東京基礎研究所入所。APL2を利用した数式処理システム、数学教育支援システムの研究開発に従事。その後公共 SE 部に異動。主に大学・官公庁担当 SE として、オープン系システムのインフラ設計・構築およびアプリケーション・デザインを手掛ける。

現在は現場業務と併せて GBS の人事評価制度 (PDF) で IT スペシャリスト職種の社内昇進審査パネル・リーダーを務め、後進のスキル育成/評価も担当。

この技術で食っていくんだ」というプライドもあるかもしれない。それはそれで大事だが…と赤石は続ける。

「われわれのこの世界はとにかく技術の進展が早い。今一生懸命こだわってやっている仕事が、極論すれば3年後には必要とされなくなることだってある。自分の専門の世界だけを見ては、もしかしたら先がないかもしれないのです」

だからさまざまな可能性の翼、武器は持っていてほしいと赤石は後輩たちにメッセージを送る。

だが、やみくもにいろいろな経験を積めばいいというものでもない。

「徹底的にその原理を理解し、押さえてしまうことです。そうすればどんな最新技術であっても簡単に自分のものにすることができます」

例えばアナログ・レコードがCDに代わり、ネットワークを利用したダウンロードに代わった。もちろんミュージシャンもディストリビューターもこの変革に対応し、進化していかなければいけないのは当然だ。それでも、音楽を送り出すという意味、文化を何かの形にして送り出すという本質は何も変わらない。IT技術も同様だ。

「とはいえ、若いころに話を聞いてもなかなか先輩のいうことは理解できないんですよね。わたし自身がそうでした（苦笑）」

自分の信念で突っ走っていたころ。赤石もそういう時代があった。素直に先輩の話が聞けない、というのではなくピンとこないのだ。それは経験の違い。自分の浅い経験では、言われている意味が分からない。

「昨年IPA*で実施したキャリア

*IPA：独立行政法人 情報処理機構

ア・インタビューで先輩の大内 DE (Distinguished Engineer：技術理事) の話を聞きました。そこで心に染みる言葉をいただいたのですが、10年前に聞いていたらおそらくピンとこなかったと思います。自分でもいろいろな経験を積んだからこそ、同じ問題意識を持ってました」

理論や理屈よりも、自分自身の経験を元にして赤石は後輩たちに対して助言、指導を行う。しかし、決して物分りのよい、好かれる兄貴分になろうとは思っていない。

「『向上心』があるかどうかが一番重要だと思います。それを持っている人にはできるだけ応援したいと思っています」

目をかけた後輩に、必要以上に手助けをするつもりはない。彼らの奮起を待つのも赤石流。

「向上心を持っていてもまだうまく成長できていない。その場合は同じプロジェクトに入ってもらって、仕事で、ミーティングで、わたし自身を見てもらう。とでもかっこいい言い方をさせてもらえれば背中を見てほしいと(笑)」

大内 DE のインタビューで聞いた話で感心したことがある。

「こうおっしゃっていました。『一番よく身に付くのは、失敗することだ』。だから後で簡単に取り返すことのできる軽い失敗（例えば子どもが石につまずいて転ぶ場合）であれば、若手が失敗しそうだと思ってもあえて黙って見ている。もちろんその後で失敗を自分がフォローすることが前提です。そしてより重要なのは、本当に大事なこと（がけから落ちそうな場合）は身をていして止めないといけない。なるほど

と思いました」

分岐点で先輩たちの言葉を受け止め、後輩たちに自分の背中を見せ、時には突き放し、時には身をていして守る。育て、生み出す。大変なことではあるが教えることの面白さを存分に味わっている。

「昔から人に教えることは好きな方で、実は中・高の教員免許も持っていたりします。難しいとは思いますが、可能なら退職後は大学の先生になりたいと思っています。今は大学の情報教育と企業が望む人材にギャップがあります。そこを両方の立場が分かる自分が埋めていければいいのではないかと」



休日、4歳の娘との時間。少し目尻を下げてエピソードを語る。

「算数のドリルでも、大人が当たり前と思っているところでつまずく。そうかと思えばいつの間にか自分流の計算を始めたり。ある時、暗算がカッコいいと思っているらしく、難しい計算を一生懸命暗算しようとしていることがありました。途中経過も紙に書いたほうが早く計算ができるのだと親が言っても聞かない。それならとストップウォッチで『さあどちらのやり方が早く答えが出せる?』。これで納得してくれましたね。客観的な指標を使って人に納得してもらおうという点で、仕事の上でも使えるやり方かもしれないと思いました」

ここでも教えることの難しさと楽しさが。赤石の背中を見て育つ者たちは、今度はどんな人を育てていくのだろうか。